

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくり in ほくりく



絵 柴澤 一嘉

「さりん橋と椿」

新潟県阿賀町津川の「さりん橋」と「寒椿」を描きました。

2023 NEW YEAR

- 新年のご挨拶 ②
近藤 淳((一社)北陸地域づくり協会 理事長)
- 年頭のご挨拶 ③
内藤 正彦(国土交通省 北陸地方整備局長)
- 随 想 ④
阿賀川と流域の住民との深い関係
石田 明夫((特非)会津阿賀川ネットワーク理事長)
- 特別企画 ⑥
新潟バイパスと古町が立体でつながる
整備が進む万代島ルート
松平 信治(北陸地方整備局 新潟国道事務所長)
- 特集「地域とともに」 ⑫
北陸地方における酒蔵建築の立地と活用実態
—新潟県、富山県、石川県を対象として—
新潟大学 都市計画研究室
- シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」 ⑮
絶滅危惧種オオルリシジミを野に戻す活動で
ふるさと岩原の元気をつくりだす
岩原の自然と文化を守り育てる会
- 北陸再発見 ⑱
中谷宇吉郎 雪の科学館を訪ねて
- 会員だより ⑳
- 伝言板 ㉔

新年のご挨拶

(一社)北陸地域づくり協会 理事長

こんどう あつし
近藤 淳



新年明けましておめでとうございます。

会員の皆さまにおかれましては、健やかに新年を迎えられたこととお喜び申し上げます。一方で、想像以上に長引くコロナ禍にあって、制約の残るお正月を過ごされた方も多いと思います。

今年の干支は「癸卯＝みずのと・う」。「癸は揆（はかる）に通じ、果実の重さを量るほどの成長した状態。卯は茂るに通じ、門が開き飛び出る形を表す」という意味があるそうです。つまり「3年続きのラニーニャ現象やコロナ禍が和らぎ、これまでの努力が実を結び春が訪れる」と期待したいところです。

一年前の創作四字熟語では「七菌八起」（ななころなやおき）が選ばれています。6波が来ても7波がきても負けずに起き上がろうという思いが込められています。結果は、年明けから第6波、夏には第7波、現在は、少なくとも北国では第8波。これでは「七転八倒」と思ってもみたくありません。

正しく恐れようと言っても、ゼロコロナと集団免疫獲得は両極端ですし、ワクチンが切り札と過度に期待していたかも知れません。ワクチンの接種効果は重症化の予防や後遺症の低減と限定的で、接種率も上がらない状態です。まだまだ新型コロナウイルスとの戦いは油断禁物と考えた方が良さそうです。

私たちの関係する自然災害への対応で考えてみると、総力戦で挑む防災・減災プロジェクト、

流域治水など総合的な施策に転換し、昨年8月の新潟や石川での豪雨災害の復旧にあたっては早速この考え方が実践されていると聞いています。

また、冬期の大規模渋滞を契機に、できるだけ道路を通行止めにしたとの目標から、道路ネットワーク全体として大規模な車両滞留を徹底的に回避することに目標をあらため、気象状況によっては不要不急の交通を抑制することも含めた施策に転換しています。

過度にハード整備に期待するのではなく、住民や道路利用者も痛みや制約を受忍し、行政にはそのための情報提供が求められています。

想定を超えた感染症や災害への対応にゴールはありません。北陸地域づくり協会としても「七転び八起き」「失敗は成功のもと」の精神で、防災エキスパート活動や技術伝承に努めてまいりたいと考えています。

このためには会員の皆さまの「長年積み上げてきた経験と知識」が不可欠です。引き続き皆さまのご指導・ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

2023年が皆さまにとって健康で良い年になりますよう、心より祈念し新年のご挨拶とします。



年頭のご挨拶

国土交通省 北陸地方整備局長

ないとう まさひこ
内藤 正彦



令和5年の新しい年を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

一般社団法人北陸地域づくり協会の会員の皆様には、平素より国土交通行政の推進に、ご支援とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年は、永きにわたり地域の安全・安心を守り、通水100年を迎えた大河津分水路や通水50年を迎えた関屋分水路の節目のイベントなどを通じて、改めて社会資本の役割や使命を広く国民の皆様にご存知いただくことができました。

また、10月には白山の地すべり対策の要となる万才谷排水トンネルの完成、本格的な雪寒期を前に11月には国道8号柏崎バイパス、12月には国道49号水原バイパスの開通を迎え、地域の安全なくらし、産業、観光振興の下支えとなることが期待されます。

一方、自然災害の頻発・激甚化するなか、昨年は、6月の石川県能登地方を震源とする地震、8月の大雨など、北陸管内でも災害に見舞われ、防災・減災、国土強靱化の更なる推進が求められる1年となりました。

北陸地方整備局では、令和元年10月の台風19号により大きな被災を受けた千曲川において、信濃川水系緊急治水対策プロジェクトに基づき、堤防強化対策、狭窄部の河道掘削、遊水地整備など計画的に進捗を図っています。

また、地域経済の活性化や地域の安全・安心に向けた大規模プロジェクトについては、「大河津分水路改修事業」、日本海沿岸東北自動車道「朝日温海道路」、「利賀ダム建設事業」、能越自動車道「輪島道路」など、事業の着実な進捗を図って参ります。さらには、流域治水プロジェクトの推進、インフラ老朽化対策、激甚化する災害対策、緊急時の道路ネットワーク整備（ミッシングリンクの解消）とダブルネットワークの構築を進め、地域の安全確保を図って参ります。

これらに対応するため、昨年12月には「物価高克服・経済再生実現のための総合経済対策」

として、「物価高騰・賃上げへの取り組み」、「新しい資本主義」の加速、「防災・減災、国土強靱化の推進」等が位置づけられ、一般会計の歳出総額およそ29兆円の令和4年度第2次補正予算が成立しました。北陸地方整備局としても、確保した予算を令和5年度当初予算と合わせ確実に執行し、早期に効果を発現して参ります。

人口減少・少子高齢化、気候変動への対応（巨大災害リスクに対する流域治水等の適応策、カーボンニュートラル（CN）の実現）など、建設業を取り巻く現状を踏まえると、担い手確保に向けた働き方改革は待ったなしの喫緊の課題です。北陸地方整備局では、労働時間の縮減のため、時間外労働の上限規制の令和6年4月適用を待たず、北陸地方の公共発注機関と連携し、週休二日や適正な工期の確保などに積極的に取り組んでいます。

また、建設業の生産性の向上を図るため、令和5年は建設分野のDX（デジタル・トランスフォーメーション）による変革を一層加速させる「躍進の年」として、BIM/CIMの全面適用をはじめ、プレキャスト製品の積極的な活用、遠隔臨場・遠隔検査の更なる拡大、書類の簡素化・電子化などやれるべきことは果敢に取り組みます。さらに、北陸の独自色をもった「北陸インフラDX人材育成センター」の整備を進めており、除雪作業の担い手不足などに伴う要員の確保や技能の維持に関する課題にも対応して参ります。

北陸地域づくり協会におかれましては、建設分野の専門的知識・技術の普及・伝承のための北陸建設振興会議の活動、災害に対する安全・安心の推進のための防災エキスパート活動など、北陸地方の更なる発展に貢献いただき、心から感謝申し上げます。

結びに、北陸地域づくり協会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝を心からご祈念申し上げます。年頭のご挨拶とさせていただきます。

阿賀川と流域の住民との深い関係



いしだ あきお
石田 明夫

特定非営利活動法人会津阿賀川ネットワーク理事長

福島県会津若松市出身。会津若松市職員を退職し、一般社団法人会津歴史観光ガイド協会を立ち上げ、令和元年からは特定非営利活動法人会津阿賀川流域ネットワーク理事長をつとめる。専門は考古学で、縄文時代から戊辰戦争までの発掘調査・研究をしている歴史家。大河ドラマ「天地人」の福島県部分の時代考証、「八重の桜」にも協力。防災士。

■ 阿賀野川・阿賀川と「揚川」

新潟県では阿賀野川、福島県では阿賀川と呼ばれ、江戸時代会津藩では「揚川」と呼んでいた。会津藩が文化6(1809)年に編纂した『新編会津風土記』には、

「日橋川、水源は猪苗代湖なり耶麻、河沼二郡の間を流れる。鶴沼川、只見川と落合、蒲原郡を経て海に入る。会津中大小の諸水此川に入らざる者なく、会津第一の川なり、古歌に読まる会津川も是なり、只見川と落合て下を揚川と云う」

とあり、「揚川」と呼んでいた。「揚川」の意味は、川の水かさが急に上がることを意味し、南会津の山間部で大雨が降っても、下流の県境付近は、晴れていることもあり、下流で急激な水位の上昇が度々起きたことによる。

新潟県東蒲原郡阿賀町には、東北電力揚川ダム・発電所がある。明治22年町村制が実施され、清川村(角島村、京瀬村)、西村、大牧村、谷花村(小花地村、谷沢村)が合併し「揚川村」が誕生、津川町を経て現在は阿賀町となっている。旧揚川村は、阿賀野川を利用し新発田、五泉・新津・新潟、村松方面へ材木や荷物を舟から荷揚げした地域で、会津藩の重要な川港として荷揚げをした場所である。

会津藩士の高嶺覚大夫慶忠が寛政元(1789)年頃藩に提出した『会津鑑』には、揚川について次のように書かれている。

「揚川の源、當邑(当村)領分、尾瀬沼を出て同郡(南会津郡)只見村まで揚川と云う、只見村より下流は只見川と云う、河沼郡片門村より下流を又揚川と云う、同郡宮月村に至り日橋川に合う。是より下流分を揚川と云う」

とあり、只見川についての上流部と下流部を「揚川」と呼び、中間部を只見川、日橋川と合流した下流を「揚川」と呼んでいた。

さらに、会津若松市を北に流れる阿賀川は、『新編会津風土記』や『会津旧事雑考』によると、源流から田島までを「荒海川」、田島から下流を「大川」、下郷町で鶴沼川と合流すると「鶴沼川」、会津美里町本郷から下流を「大川」と呼んでいたのであった。大川とは大きな川の意味である。明治時代に入ると、大川は阿賀川の上流本川であることから阿賀川に統一されている。

■ 水害記憶遺産

会津盆地西側に位置する河沼郡会津坂下町大字大上に10世紀前半に造られた国指定重要文化財、薬師瑠璃光如来坐像を安置する上宇内薬師堂がある。

国指定重要文化財『塔寺八幡宮長帳』の永正15(1518)年の記録に

「七月十四日、大水はんげ(坂下)の薬師堂之はしら(柱)はん分までみつ(水)つき申候」

と書かれ、現在も堂内柱4本に半分の位置に洪水痕跡が残されている。



洪水の痕跡が残る柱(上宇内薬師堂内)

堂は、慶長 16(1611) 年 8 月 21 日の「慶長会津大地震」により倒壊し、元禄 4(1691) 年に再建されたが、元の部材を利用し、洪水を忘れないために、柱の痕跡は消さなかった「水害記憶遺産」である。

また、会津では天文 5(1536) 年に「白髭の水」があり、会津盆地西側を流れていた鶴沼川（現在の阿賀川）が、盆地の南で流れが変わり、北進する現在の流れに変化した大洪水もあった。

■ 会津盆地に湖出現

『新編会津風土記』や『会津鑑』によると、「慶長会津大地震」では、阿賀川が会津盆地から出口となる喜多方市慶徳町真木において断層が競り上がり、土砂崩れで、阿賀川が塞き止められ、23 の集落が水没、裏磐梯の桧原湖 10.7km² より広い湖が誕生。水が引くまで 5 人の藩主が関わって、約 50 年を要している。

会津藩では阿賀野川を利用した舟運について、保科正之公は「会津城下より隣国居城迄の道法」を定め、若松城下の大町四つ角を起点に「本道五筋（五街道）」、とともに「津川より越後村上草水村（新潟市秋葉区草水町）へ出る川舟路」を定め『会津藩家世実紀』の慶安 2(1649) 年、人や物資の往来を活発にし阿賀野川舟運の重要性を認識していた。

■ 今に受け継がれる阿賀川本川の管理形態

江戸時代から、阿賀川や日橋川、湯川などの背後地に隣接する集落が、水防のために会津藩に願い出て堤防を構築し、雑木林から薪を確保するなどの日常管理を行っていた。集落を洪水から守る行為は、明治時代以降も受け継がれ、除草や雑木の撤去、洪水から守る「しがらみ」や柳を植えて堤防の構築がなされていた。

『新編会津風土記』には

「此川、^{ひろだいら}広平の地を流れ、所々に井手をせき田地に注ぐ、然れども水勢つよく洪水の時、往々田圃を害する故、兩岸に土堤を築き多く柳を栽て水災に備ふ、河原広く七・八町の間、平砂にして水道常になし、岩魚、ヤマメ、カジカ、鱒、鱒を産す。年魚、サケ上る」

と書かれ、堤防構築の記録が残る。

「広平の地」会津若松市には阿賀川に架かる 574 m の「蟹川橋」（県道 59 号）がある。平らな砂地であったため、蟹の横歩きのようにして渡れたので名付けられた。

昭和 14 (1939) 年に新郷発電所が建設される以前まで、サケとマスが遡上し縄文時代から重要なタンパク源であった。サケ・マスを捕る漁具が南会津町の奥会津博物館に保存されている。



鮎の放流

江戸時代から地域で行ってきた堤防の管理や除草は、平成 16(2004) 年 5 月に誕生した“特定非営利活動法人 会津阿賀川流域ネットワーク”が地域を取りまとめ受け継いでいる。会津地方は、国道は東北地方整備局管轄であるが、河川は北陸地方整備局に属している。現在は、国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所の委託を受け、本川流域の背後地に位置する 14 団体で、除草や河川保護団体の育成事業を実施している。



大型トラクターを利用した除草

全国的にみても建設業者以外で、大規模な堤防除草をしている例はなく、地域住民の阿賀川、日橋川、湯川に対する水害、防水、利水、管理に対する意識の高さが伺える。令和 6(2024) 年には、結成 20 年目を迎える。



新潟バイパスと古町が立体でつながる 整備が進む万代島ルート

北陸地方整備局 新潟国道事務所長 松平 信治



はじめに

令和4年10月2日早朝、新潟市内で整備が進められている万代島ルートの高架橋構築に向けて、栗ノ木バイパスの道路切り替え（以下、セパレート化）を行った。これにより、万代島ルートの完成時に地表部となる位置に道路が切り替えられ、中央の高架橋を構築できる段階となり道路の全貌が見えてきた。

今回は、整備が進む万代島ルートを構想段階からレビューし今後の展望をまとめた。

万代島ルートの構想

新潟市の発展に伴い萬代橋の下流に橋が必要であることは大正時代から記録に残っている。昭和49年に構想が発表されたみなと大橋も実現には至らなかった。

一方で萬代橋の交通量はモータリゼーションの進展により増加の一途をたどり、昭和60年には6万5千台/日と4車線では限界となっていた。また、萬代橋付近の左岸は、開港五港の港町として繁栄していたが、交通の不便さなど

から人口が減退し、新潟のまちづくりのためには、新潟の発祥の地であるこの地域を活性化させることが課題であった。

このような中、昭和58～59年度に旧国土庁、旧建設省、旧運輸省が合同で「新潟港周辺地域整備計画調査」（以下、調整費調査）を実施し、新潟西港を中心とした臨海部の整備と、これに整合した周辺市街地の整備計画、萬代橋下流に新たな二本の連絡路「万代島ルート」「港口部ルート」などが提言された。

ここで初めて「万代島ルート」という名称が与えられている。

臨海部の整備との整合を図るなかで、万代島ルートの信濃川渡河位置は、昭和49年に計画されたみなと大橋より上流側とされた。これにより、桁下高をみなと大橋の33mから小型船舶が通過できる11mまで低くすることが可能となり、みなと大橋では不可能であった「下駄履きでわたれる橋」となり歩行者にもやさしい計画となっている。



万代島ルートの位置図

■実現に向けて(都市計画決定)

昭和62年6月、新潟市主催による万代橋下流連絡路建設促進大会が開催された。

この大会で、万代橋下流連絡路として調整費調査で提言された万代島ルート、港口部ルートが提示され、万代島ルートについては、新潟バイパスの紫竹山ICから栗ノ木バイパスを通過し、萬代橋から500m程度下流を渡河し（以下、下流橋）寄居町に至るルートが示された。

当事務所においては、万代島ルートについて直轄国道としての路線調査を進め機能・役割を以下の4つにまとめた。

①都心地区等へのアクセス向上と都心地区活性化を促進

古町周辺地区、万代地区、新潟駅周辺地区といった都心地区や沿道地域、西港地区等への高速交通施設からのアクセス性が飛躍的に向上し、都心地区の活性化につながる。

②交通量の伸びに対応し交通渋滞を解消・緩和

自動車交通量の伸び、特に下流橋の完成による栗ノ木バイパスの交通量の伸びに対応し、交通渋滞を解消する。特に、現在、ボトルネックとなっている主要交差点での交通渋滞を緩和する。

③都市内交通の円滑化と交通規制の緩和

明石通や東大通、萬代橋、榎谷小路の交通量を軽減することにより、現況の交通規制の見直しが可能となる。

④沿道の環境改善と活性化

騒音の低減と、植樹帯・歩道設置による環境の保全や交通安全の確保を図りつつ、沿道開発による地域の活性化を促す。

このような機能・役割を担保する道路構造として、栗ノ木バイパスの各交差点や新たに建設される信濃川渡河橋梁前後の交差点を立体化し、新潟バイパスから古町まで立体でつながる平面拡幅高架併用型とした。



万代橋下流連絡路建設促進大会で配布されたパンフレット「あすへのかけ橋」(一部)

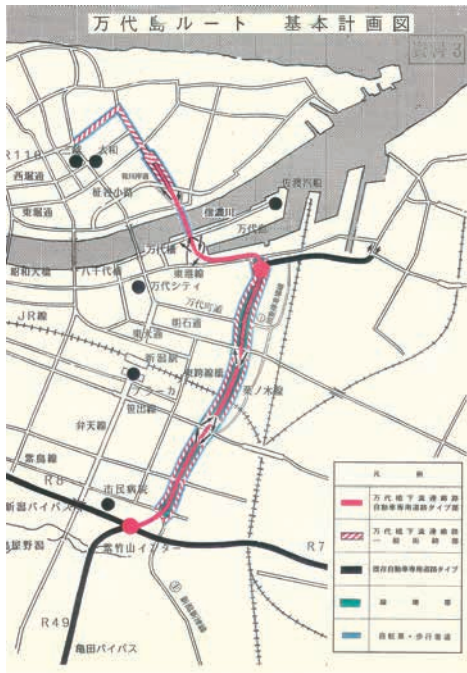
万代島ルートは市街地を通過しているため関係者が多い。このため、都市計画原案の作成に先立ち、万代島ルートの基本事項について理解を得るため、平成元年度に沿線住民を対象に基本計画案の説明会を行った。



基本計画案の説明会での配布資料(一部)
(パンフレット「あすへのかけ橋」とほぼ同ルート)

基本計画案の説明会は自治連合会の単位で16回、自治会単位で24回、計40回開催し、延べ2千人弱の市民に出席をいただいた。

説明会では土地等の補償を含めた生活再建の問題をはじめ賛否両論、多岐多様な意見・要望が出された。特に高架構造については、圧迫感があること、通過交通のため生活道路ではないことなどから、道路拡幅量の少ない平面街路方式にすべきとの意見が多かった。



基本計画案の説明会での配布資料(一部)

基本計画案の説明会終了後には沿線住民から架橋事業そのものに反対、高架道路の反対などの要望書が提出された。

新潟県や新潟市と協議を進め道路構造としては平面拡幅高架併用型が合理的な構造であるとの認識一致のもと、平成3年度から都市計画決定の手続きを開始した。

都市計画法に基づく案の縦覧において、約1,500通の意見書の提出があり、そのほとんどが計画案に否定的な意見書であった。このため、新潟市都市計画審議会では、この計画の実現化にあたっては、沿線住民の理解と協力が不可欠であるとし、「新潟市は今後とも、沿線住民との話し合いを続けながら、住民合意に努めること」など、8項目の付帯意見を付して原案通り決定された。

■ 事業スタート

都市計画決定の翌年の平成5年度に万代島ルートの中でも整備優先度が最も高い信濃川を渡河する「万代橋下流橋」延長1.5kmが一般国道7号の改築事業として事業化された。

万代橋下流橋(以下、柳都大橋)の設計方針として、近接する萬代橋及び同時期に進められている万代島再開発と調和を図る、加えて高齢化社会に対応すべく歩道を広幅員としている。

柳都大橋は3径間連続PC箱桁橋とし、萬代橋と同様にアーチ曲線を強調し、橋側面には耐久性を高めるためファインセラミックによる化粧張りを施している。

なお、この化粧張りは全国初であるとともに、下部工でコスト削減できた費用を充てている。

また、基礎は新潟地震にも耐えた萬代橋と同様にニューマチックケーソンとし、当時としては最新であった桁の落橋防止システムやゴム支承などを採用して耐震対策を行っている。

柳都大橋の右岸は紫竹山ICからの高架橋が接続できる構造、左岸も^{まぐさ}秣川岸通交差点の立体化時に一体となる橋梁構造となっており、新潟バイパスと古町が立体でつながる構造を担保している。



高架橋の接続を待つ柳都大橋

なお、秣川岸通交差点から新潟島区間は街路構造とし、広幅員な歩道に植樹帯も設け、最初から無電柱化することで、優れた都市景観と緊急輸送道路としての機能を確保している。

また、道路計画地内に建っていた旧第四銀行住吉町支店は歴史的価値が高いとして、新潟市歴史博物館みなとびあに移築復元されている。

■ 柳都大橋の開通(平成14年5月)

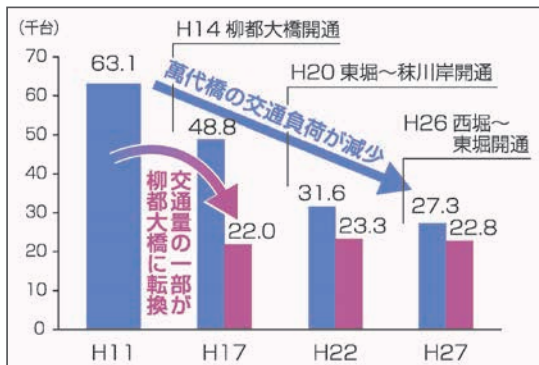
柳都大橋は、昭和59年度の調整費調査で同時に提言された港口部ルート「新潟みなとトンネル」と同日(5月19日)に開通した。

両ルートの必要性が同時に提言された上に、一緒に開通したことは歴史的な巡り合せであり、関係者のご苦勞が感じられる。



新潟みなとトンネル・柳都大橋開通式(平成14年5月19日)

柳都大橋整備の具体的な効果として萬代橋の交通量低減がある。柳都大橋開通前の平成11年の交通量は約6万3千台/日であったが、柳都大橋開通から13年後の平成27年の交通量は約2万7千台/日と半減し、萬代橋橋詰広場でイベントが開催されるなど、市民の交流や新潟のまちづくりに貢献している。



萬代橋と柳都大橋の交通量の変遷
[出典] 全国道路・街路交通情勢調査

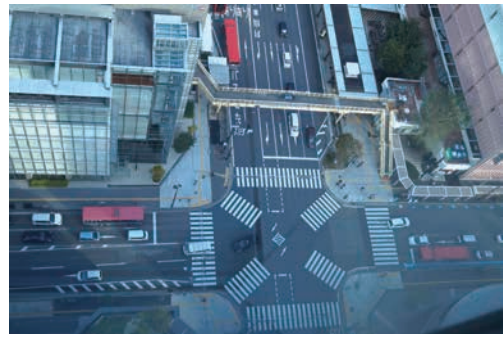
柳都大橋の開通により萬代橋が市民にとってより身近なものとして認知され、平成16年の重要文化財指定につながっているものと考えられる。

萬代橋を含む東大通りと^{まさやこうじ} 榎谷小路は新潟市の都心軸(以下、にいがた2km)であり、交通量が多くほとんどの交差点で右折ができなかった。

柳都大橋開通後、萬代橋の交通負荷が低減したため、にいがた2kmの交通量も減少した。

これにより、鏡橋交差点には平成18年4月に右折レーンが設置された。その後、東港線十字路交差点にも右折レーンが設置され、さらにこの交差点は令和3年11月に横断歩道がスクランブル化され、横断歩道橋も撤去された。

柳都大橋が開通したことで、にいがた2kmが人にも車にもやさしい道路に変貌しつつあり、景観形成にもつながっていると考えている。



東港線十字路のスクランブル化(令和3年11月)



東港線十字路の横断歩道橋撤去(令和4年9月29日未明)

■ 弁天ICの追加(平成17年4月)

将来、万代島ルートが完成すると紫竹山ICでは新潟バイパスと市道紫竹山鳥屋野線(以下、^{しちょう} 紫鳥線)が直接つながらない構造となる。

そこで、現在の機能を確保するため、竹尾IC側には主要地方道新潟新津線(以下、新潟新津線)、桜木IC側には市道笹口紫竹山線(以下、弁天線)にそれぞれハーフICが計画された。この2つのハーフICのうち弁天線に計画された弁天ICは、新潟バイパスの紫竹山ICや桜木ICの交通負荷の早期軽減の観点から、万代島ルートの整備に先行して、アクセス道路となる弁天線の整備に合わせて平成17年4月に供用した。

■ 栗ノ木バイパス区間(栗ノ木道路・紫竹山道路)の事業化(平成19年度～)

柳都大橋の開通後、次は栗ノ木バイパス区間への事業展開となる。栗ノ木バイパスには紫竹山ICも含め主要渋滞箇所が5箇所、事故危険区間が4区間あり、万代島ルートの中でも早期での整備が待たれていた。

一方で新潟駅付近連続立体交差事業が平成18年度に事業化された。

鉄道高架化区間は栗ノ木バイパスとの交差点にまで及んでいた。この交差点については両事業で必要とする土地があり、用地買収にあたっては同時に行うことが合理的であったことから、この鉄道との交差点を含む「栗ノ木道路」が平成19年度に事業化となった。

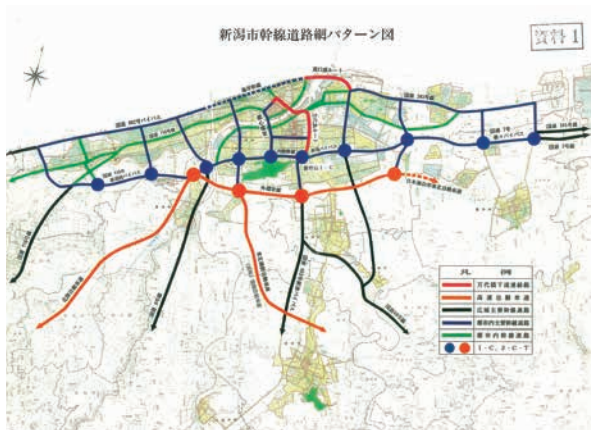
さらには、都市計画道路網川原線の整備が進み栗ノ木バイパスに接続することとなった。この交差点についても用地取得など事業調整が必要となったことから平成23年度に接続交差点を含む「紫竹山道路」が事業化した。

栗ノ木バイパス～柳都大橋区間(沼垂道路)の事業化(令和4年度)

令和2年に新潟市は、新潟駅から古町までの都心軸を親しみやすい呼称として「にいがた2km」とネーミングした。

この動きに触発され、国、県、市、NEXCO東日本の若手職員を中心とした有志が勉強会を立ち上げ「にいがた2km」の未来に向けた提言として「にいがた2km STREET VISION」をまとめた。この提言では、「人」中心とし「居心地が良く歩きたくなるまちなか」が重要!とし、このためには、道路空間を人中心の空間へ再編することがイメージされている。

実現していくためには「にいがた2km」から自動車交通を減少させる必要があり、万代島ルート機能・役割を最大限に発揮させ、柳都大橋へさらなる交通の転換を促すため、令和4年度に「沼垂道路」が事業化し、実現への道筋が整った。



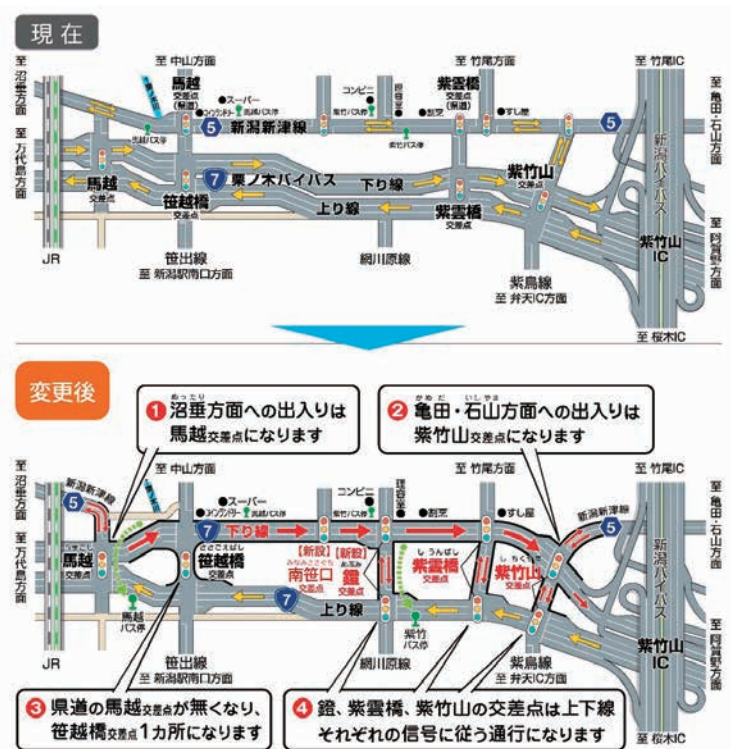
基本計画案の説明会での配布資料(一部)

栗ノ木バイパスのセパレート化(令和4年10月)

馬越交差点から紫竹山IC間は栗ノ木道路・紫竹山道路の両事業が進み、令和4年10月にセパレート化を行った。

このセパレート化により、新潟新津線も含め8車線あったものが6車線となり、新たに南笹口交差点と笠交差点が新設された。

また、新潟新津線が一方通行になったことから、笹越橋交差点、紫雲橋交差点、紫竹山交差点の形状が大きく変更された。



セパレート化へのステップ図(令和4年10月2日切り替え)

このため、交通混乱を未然に防止するための広報や現地看板など、考えられる対応を行った。しかし、セパレート化直後は、交差点の通過方法が分からず迷走や逆走が発生し、交差点に接続する主要地方道新潟黒埼インター笹口線(以下、笹出線)、紫鳥線、新潟新津線の渋滞が助長される事態となった。

なお、2ヶ月程度経過している現在では、迷走や逆走は減少し、各交差点の接続道路の渋滞もセパレート化前の状態に戻ってきている。

一方で栗ノ木バイパス本線は、夕方の時間帯に万国橋交差点から紫竹山 IC に向かう下り線の渋滞が顕在化した。

これは、交差点が2箇所新設されたことと、新潟新津線が接続する馬越交差点の交通負荷が増えたためであり、事業途中での致し方ない部分でもあるが、ご意見等をいただきながら現地での交通誘導や広報を工夫して実施し、引き続き交通安全に心がけていきたい。



セパレート化直後の栗ノ木バイパス（令和4年10月）

■南紫竹 IC の開通（令和4年11月）

栗ノ木バイパスのセパレート化と併せて紫竹山交差点の交通負荷を低減させるため、令和4年11月に南紫竹 IC のオンランプを開通させた。

紫竹山交差点は、セパレート化により一般的な平面交差点から上下線が分離された外回り方式の交差点に形状変更した。

このため交差点処理能力が低下することから、交差点の交通負荷を低減させるため、南紫竹山 IC のオンランプの開通を早めたものである。



南紫竹山 IC オンランプ（令和4年11月2日供用）

■「にいがた2 km」との連携と今後の展望

万代島ルートは、みなとまち新潟のまちづくりや重要文化財に指定されている萬代橋の交通負荷の軽減からスタートしている。このルートは港湾区域を通過しているものの港湾計画への位置づけが調整費調査によって円滑に行われたこと、また事業推進にあたっては、旧第四銀行住吉町支店移設や家屋移転の代替地の確保など、新潟市の多大な協力をいただきながら推進することができている。

また、万代島再開発、新潟駅付近連続立体交差事業を含む新潟駅周辺整備事業、「にいがた2 km」など、将来に向けたまちづくり施策と密接に連携しながら進められたことに対し、関係者に感謝申し上げたい。

新潟市は、「にいがた2 km」の周辺エリアを都市再生緊急整備地域や緑化重点地区に指定し、民間開発によるビルの建替や緑化を促進させる取り組みをスタートさせた。

また、この2 kmの端末に位置する古町においては、旧新潟三越の跡地に高層ビルによる再開発事業の計画が動き出し、新潟バイパスと古町が立体でつながる万代島ルートの全体も沼垂道路の事業化でその実現が見えてきた。

万代島ルートの整備を着実に進めることで「にいがた2 km STREET VISION」の実現と新しい古町を支える最新インフラとして機能・役割を発揮していきたい。

参考：にいがた萬代橋—その100年—（第三版）
（社団法人北陸建設弘済会）

新潟国道事務所

<https://www.hrr.mlit.go.jp/niiokoku/>



特集「地域とともに」

北陸地方における酒蔵建築の立地と活用実態 —新潟県、富山県、石川県を対象として—

■ 都市計画の視点から見る「酒蔵建築」とは

新潟大学都市計画研究室（岡崎篤行教授）が調査を進めている「酒蔵建築」とは、酒造場の敷地内にある生産部門（狭義の「蔵」）、作業用建物、管理用建物、住居用建物、迎賓用建物、庭園等すべてを合わせたものをさす。

酒造場は、大量の米を使うため江戸時代から免許制で、地域の有力者によって創業されてきた。同時に、現在のような流通がなかった当時は地域ごとに酒造場が存在していた。このため代々受け継がれてきた酒造場は、地域文化と深く結びつき、建築的価値を有するものも多い。

こうした特徴を持つゆえに、近年では観光やまちおこしに活用され、交流人口の拡大に向けた地域資源のひとつとして期待を担うようになってきているが、建築、都市計画の視点から網羅的に調査されたことがなかった。従って、自分の地域にある酒蔵建築を、主観的な価値付けはできても、客観的な評価が不可能であり、地域的にみた酒蔵建築の共通点があるか否かも解っていなかった。

岡崎教授は「製品である酒に注目した研究やツーリズムに関する書籍は多数あるが、酒蔵建築に着目し全国的視点で行われた研究は皆無に近く、私自身は研究者を1人しか知らない」と言う。

調査は新潟県を皮切りに富山県、石川県で開始し、現在福島県などでも進めている。今後も調査を進めて全国を網羅、酒蔵建築の実態を明らかにすることを目的としており、岡崎教授はこれを酒蔵建築に関する基礎研究と位置付けている。



瑞泉寺（南砺市井波）の門前町、八日町通りに溶け込む若駒酒造場

■ 酒蔵を巡る状況 調査研究の緊急性

ここ10年、日本酒の輸出額は右肩上がり、2021年実績は402億円と、前年比66.4%の大幅増を記録（財務省貿易統計）。輸出用に限った日本酒製造免許場が新設されるなど明るい話題となっている。

一方で、国内需要は右肩下がり。1970年には製造免許場が3,533場あったが、2019年には1,563場、2021年には1,164場へと急激に減少している。しかも、国税庁の調査では1,164場の6割近くが「欠損または低収益」という経営状況にあり、免許場の減少に歯止めがかかる見込みは薄い。歴史的価値の高い酒蔵建築が「その価値もわからないまま失われてしまう」と岡崎教授は調査研究を急がなくてはならないと話す。

この様な中で、「日本酒王国」とも称してきた新潟県は、89場（焼酎蔵1場を含む）と全国で突出して免許場数が多い。新潟大学は新潟県醸造試験場、新潟県酒造組合と連携協定を結び、日本酒に関する科学や文化等あらゆる面から新たな学問領域とするため日本酒学センターを2018年に立ち上げて取り組んできた。

都市計画研究室は料亭建築、花街の研究で日本酒学センターに参加。都市計画、建築文化の側面から日本酒学構築にかかわってきた。料亭建築、花街の基礎研究としての全国調査を終え、「酒を嗜む場」から「酒をつくる場」へ研究フィールドを移した。調査はこうした背景から酒蔵の協力が得られやすい新潟県から始められた。

■ 調査の概要と結果

調査項目は、

- ①立地（村落か町場か、主要道路沿いか）
- ②建物の構成と配置形態（町屋型か屋敷型か）
- ③歴史的建物の保有状況
- ④見学や展示、イベントなどの実施、用途変更の有無など。

酒蔵数（令和3年調査当初 酒造組合加盟数）は、新潟県 89 場、富山県 18 場、石川県 34 場。

①立地

[新潟県] 89 場のうち 80 場が、終戦直後までに存在していた集落内に現存し、集落属性が分類できた 73 場のうち 44 場が町場に、29 場が村落に立地。68 場が主要道路沿いに立地し、うち 26 場は街道沿いにある。

[富山県] 調査できた 8 場のうち 7 場が終戦直後までの集落内、集落属性が分類できた 13 場のうち 8 場が町場、5 場が村落に立地。11 場が主要道路沿いにある。

[石川県] 34 場のうち 31 場が、終戦直後までの集落内、集落属性が分類できた 28 場のうち 18 場が町場に立地。21 場が主要道路沿いにあり、そのうち 11 場が街道沿いに立地。

②建物の構成と配置形態

[新潟県] 構成が把握できた 78 場のうち 54 場に住居用建物があり、3 場に迎賓用の建物が

ある。主屋の形態は確認できた 78 場のうち 49 場が屋敷型、23 場が町屋型。

[富山県] 構成が把握できた 4 場のうち 3 場に住居用建物があり、屋敷型と町屋型がそれぞれ 7 場。

[石川県] 構成が把握できた 5 場のうち 4 場に住居用建物があり、1 場に迎賓用建物がある。34 場のうち 21 場が町屋型で、この多くは北陸町家の特徴を有する。



町屋型の酒蔵（やちや酒造・金沢市）
国登録有形文化財



屋敷型の酒蔵（鮎正宗酒造・妙高市）

③歴史的建物の保有状況（築 50 年以上）

[新潟県] 調査許可を得た 80 場のうち 60 場が築 50 年以上。

[富山県] ヒヤリング済みの 4 場全てで築 50 年以上の建物一棟以上を有する。

[石川県] 旧酒蔵 2 場を含めた 6 場が国指定重要文化財もしくは国登録有形文化財の建物を有する。

④見学・展示・イベント等の実施、用途変更の有無

[新潟県] 43 場で一般向けの公開等を実施。その大部分は用途変更をせずに活用。

[富山県] 7 場で一般向け公開等を実施。1 場で酒蔵全体をリノベーションして観光施設化。

[石川県] 23 場で一般向け公開等を実施し、4 場で増改築によって飲食やギャラリーに用途変更している。

地域文化、建造物の価値を積極的に活用することで保全する取り組みとしては、新潟県では17の登録有形文化財を含む長岡市^{せったや}撰田屋（吉乃川株式会社ほか）、同じく長岡市にある国重要文化財^{しょうらいかく}の松籟閣（朝日酒造株式会社）。石川県には現在酒造を行っていない旧酒蔵2場を含む6場が国指定重要文化財もしくは国登録有形文化財になっており、保全に向けた取り組みが行われている。

■これまでの成果と今後の展開

築50年以上の歴史的建造物は、調査が完了した新潟県では60場の酒蔵が有しており、全体の7割近い。富山県、石川県も含め、大部分の酒蔵が戦前からの集落内にあり、地域の中核を担ってきた。



吉乃川酒ミュージアム「醸蔵」
国登録有形文化財の「常倉」



朝日酒造の迎賓館「松籟閣」。初代社長・平澤與之助^{ひらさわよのすけ}の自邸として建てられた和洋折衷の近代和風建築



醸造の町と言われる長岡市「撰田屋」地区には酒・味噌・醤油などを醸造する蔵元が5軒ある。戊辰戦争、長岡空襲をくぐり抜け江戸時代から残る三国街道の歴史を感じるまちなみが人気を集めている
中越地震により建物に被害が出たが、復興作業のなかで、鏝絵のある「機那サフラン酒本舗」の価値が再認識された。敷地内建物すべてが国登録有形文化財に指定され、長岡市が保存・活用を進めている



金谷酒造店（石川県白山市）酒蔵見学
酒蔵の中で蔵元から酒造りや蔵の説明を聞いた後、試飲できる。蔵を改装したレストランもある

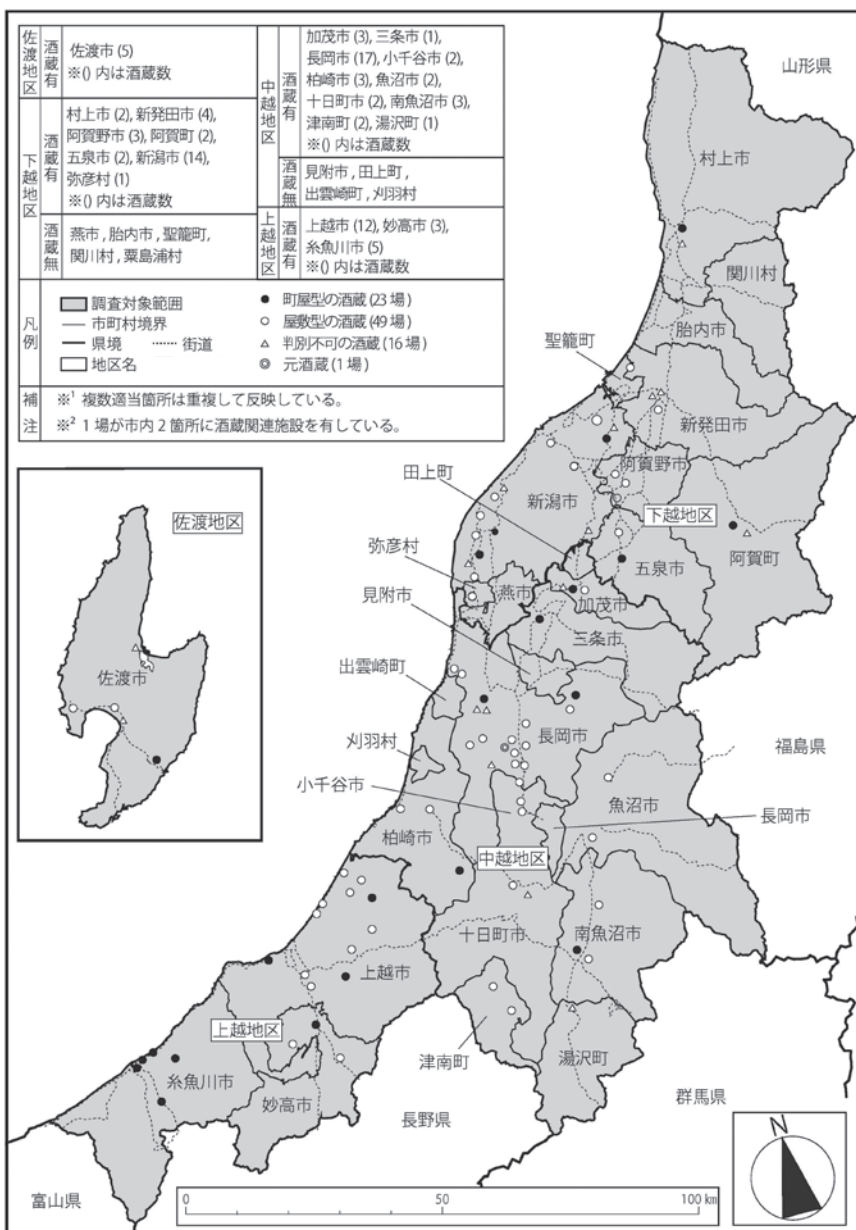
富山、石川県は調査継続中で全体像がまだ明らかではないが、一般公開やイベント等の観光事業を行っている酒造場の割合は、石川県がおよそ7割(23場)、次いで新潟県が5割(43場)、富山県が4割(7場)となっている。

岡崎教授は「酒蔵見学などは昨今どの蔵もやっているという印象を持っていたが、新潟でも半数。そうしたことも、調査しなければ明らかにはできなかった」と話す。酒造場は製造業であり、顧客は酒販店。B to Bの業態であるた

め、B to Cである酒蔵見学等の実施は、その酒蔵ごとに障壁の高さが異なり、経営方針とも密接に絡んでいる。「酒蔵にとって歴史的建造物、景観の保全が事業目的でないことは十分理解しているが、調査によって酒蔵の景観・観光資源としての価値を再発見し、地域活性化に少しでも結びついてほしい」と言う。

調査は今後も継続し、全国を網羅することを目標としている。

取材・文 橋本啓子



新潟県における建物の構成と分布図

第26回「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業に選定された「北陸地方における酒蔵建築の立地と活用実態—新潟県、富山県、石川県を対象として—」の成果報告をもとに、岡崎 篤行教授、新潟大学大学院 赤間 業理奈さんからお話を伺いました。なお、数値は調査時点のものです。



シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

絶滅危惧種オオルリシジミを野へ戻す活動で ふるさと岩原の元気をつくりだす

岩原の自然と文化を守り育てる会

■名前通り「岩ゴロゴロの寒村」

安曇野市岩原地区は、広大な安曇野扇状地の最も標高の高い山岳の麓に位置し、付いた地名は見た通り。砂礫ばかりでかつては飲水にも困ったほどで、ほとんど米が穫れなかった。「岩原の自然と文化を守り育てる会」を立ち上げ、代表を務める百瀬新治^{ももせしんじ}さんは「安曇野と言えばわさび栽培が有名で、水に恵まれた地域と思われるでしょうが、それは扇状地の下の方。岩原は、私の幼い頃でも飲水に困りました」と話す。米の穫れない地域だったため、百瀬さんの父親は戦前満州へ渡っており、帰国してから苦労して荒れ地に田畑を開いた。自身も若い頃「なんでこんなところに生まれたか」と思ったことがあったという。



岩原は壁のようにそそり立つ飛騨山脈の麓に位置する。地区にとって最も馴染みのあるのがこの常念岳だという

だが、百瀬さんの岩原に対する今の見方は違う。「米が作れず、産業も起こらず、開発もされなかったからこそ、ここで生きていくための先人の汗と知恵の跡がたくさん残っている。それが今を生きる私たちに励ましてくれる素晴らしいふるさと」と言う。

この思いから2014年、地元の同年代の人たちと「岩原の自然と文化を守り育てる会」を結成。手始めに、近所の国営アルプスあづみの公園を訪れる観光客に地元を紹介するガイドブック「これぞ安曇野 岩原のタカラ」を作った。

■国営公園とオオルリシジミ

一度はほぼ絶滅したとみられていた本州のオオルリシジミ。その生息地が、岩原の近くで見つかったのは平成に入ってまもなくの1990年頃のこと。1995年に長野県が中心となり保護活動が開始される。生息地が国営公園建設予定地内にあり、2004年にオープンした国営アルプスあづみの公園内でその生息地は「サンクチュアリ」として保護されてきた。



クララに止まるオオルリシジミ。クララの苗を配布しオオルリシジミを地域に復活させる取り組みが評価され、会は令和3年度「手づくり郷土賞」（一般部門）に選定された

この保護活動に、地元で地域活動をする百瀬さんらにも参加してほしいと声が掛かる。地元暮らし者として何ができるか話し合いを重ねるなかで「オオルリシジミが生きられなくなっ

たのは、マニアが捕獲したせいじゃなく、自分たちがクララを刈ってしまったからだ。クララを蘇らせればいい」という声が出た。

クララはオオルリシジミが卵を産み付ける唯一の植物。トイレが汲取式だった頃に虫殺しとして投入していたほか、健胃薬にも用いられていた。庭や畦に生やして使うありふれた植物だったが、必要がなくなったことで姿を消していた。保護に向け、会で株を育てて植え始めると、地域の人から分けてほしいという要望が出始める。2019年に千株を用意し地域の人たちに無償で配る活動になった。

もともとオオルリシジミは「私らの親世代でも、ここらでは珍しい蝶」だったというが、地域ではオオルリシジミを目にする範囲も着実に広がってきている。しかし百瀬さんたちがこの活動で気づいたのは「1種だけの楽園などという自然はありえない」ということ。できることから始めようと、現在はクララに加えてアゲハチョウが食べるカラタチとアサギマダラが吸蜜するフジバカマの苗も育てている。百瀬さんは「会員はほとんど農家だから、苗を育てるのは得意」と笑った。



岩原公民館のある公園に立てた看板と百瀬さん。「低くて見づらいと言われますが、大きさと高さは条例があるので…」と話す。11月放送のNHKブラタモリではガイド役も務めた

■ガイドブックを作ってからが始まり

「これぞ安曇野 岩原のタカラ」を刊行するにあたり、百瀬さんは印刷費を自己負担することにこだわった。教員を退職後、安曇野市豊科郷土博物館で勤務した経験から「助成金で印刷をすると、作った時点で完結してしまう。売って読んでもらうことこそ活動」と考えていたからだ。「たとえ売れなくとも、買った自動車をぶつけて壊したと思えばいい」と、市の助成も、会員からの共同負担の申し出も断った。

販売は、国営アルプスあづみの公園に会員が交代で出かけ、来館者に地域を紹介しながら行う。直接問い合わせをもらうこともあり、主に県外へ出た人からで「子供や孫に自分のふるさとはここだ」と自慢できる、と喜んでもらっている。

完売するには難しい3,000部を印刷したが、3年目の現在2,000部を実売。既に印刷費は回収でき、売上金はすべて活動資金へ。ガイドブックで紹介している全68箇所のうち要所に見どころを案内する看板を立てているところだ。

取材・文 橋本啓子

ガイドブック「これぞ安曇野 岩原のタカラ」



足元にある宝、日常の中にある宝を知ってもらおうという志を貫き、68項目それぞれに読み応えがある。A5 フルカラー 188 ページ 価格1,000円（税込）

問い合わせ先

岩原の自然と文化を守り育てる会

<https://www.iwahara.org/>



● 北陸再発見 ●

なかや うきちろう
中谷 宇吉郎

雪の科学館を訪ねて



世界で初めて人工的に雪の結晶を創り出した物理学者、中谷宇吉郎。石川県の片山津温泉に生まれ、生涯温泉と九谷焼、柴山瀧から見える白山の景色をこよなく愛した。その柴山瀧のほとりに「中谷宇吉郎 雪の科学館」がある。

■ 中谷宇吉郎はこんな人

中谷は1900（明治33）年、現在の加賀市に生まれた。父の卯一は代々庄屋の出で、黎明期の片山津温泉で呉服雑貨を扱う店を出していた。幼い頃から賢かった宇吉郎に期待した両親は、教育を受けさせるべく同市大聖寺だいしょうじの母の実家へ預けた。加賀前田家の分家、大聖寺藩10万石の城下町で、この頃既にあった幼稚園に通う。

大聖寺陣屋の建物を使った錦城きんじょう小学校に入学すると、九谷焼の工人で父と親交のあった浅井家に下宿、次いで大聖寺藩家老の家柄だった松見家に移す。松見家の向かいには、当時「御殿」と呼ばれた旧藩主の居宅があった。明治維新後各地の藩主は東京住まいとなったが、帰省の折の住まいだ。小学生だった宇吉郎は、たびたびここを

訪ね奥方に学校での出来事などを話したといわれる。神田健三かんだけんぞう雪の科学館顧問は「宇吉郎は、かなりユニークな教育環境を与えられた人物」と評する。同氏によれば片山津温泉はかつて湖



中谷宇吉郎
(1900-1962)

中から湧き出ており、明治に入ってそこを埋め立てて温泉地としたもの。温泉街の対岸がほぼ直線なのは戦後の干拓事業によるもので、宇吉郎が育った当時は今のおよそ3倍、小松市まで続く広大な湖だった。ちなみに錦城小学校卒業生には「日本百名山」で知られる深田久弥ふかたきゅうやもおり、大聖寺旧市街に生家が残っている。

小学校を卒業した1913（大正2）年に父卯一うきちろうが亡くなると、進学先を工業学校窯業科から

小松中学校に変更。父は、長男である宇吉郎に家業を継がせず、九谷焼の工人にしようとしていたが、宇吉郎は学業の継続を希望していたのだ。その後金沢第四高等学校から東京帝国大学理学部物理学科へ進み、そこで生涯の師と仰いだ寺田寅彦^{てらだ とらひこ}と出会う。

大学卒業後は「寺田研究室」が設けられていた理化学研究所に就職、ここで新設される北海道大学物理学部の教授候補に決まり、文部省から2年間のイギリス留学を命じられる。

1930（昭和5）年に北海道大学へ赴任すると雪の結晶の研究を開始。冬季間を十勝岳の山小屋で雪の結晶の研究を続け、1936（昭和11）年には新設された低温実験室で世界初の人工雪の生成に成功した。自然にできるさまざまな形の雪の結晶を再現させ、どういう条件下で結晶ができるかを明らかにした。1939（昭和14）年には東宝文化映画「雪の結晶」を制作、アメリカで行われた国際雪氷学会でこの英語版が放映され注目を集めた。



北海道大学で中谷が作った低温実験室のレプリカ。結晶をつくる装置とともに仕組みが展示されており、雪のでき方がよくわかる

戦時中は鉄道のレールを持ち上げる凍上や航空機の着氷の研究を行い、戦後の1952（昭和27）年にアメリカの雪氷永久凍土研究所^{しょうへい}に招聘され、2年余あまりをアメリカで過ごす。帰国した後も3度のグリーンランド遠征隊に加わり、深層から掘削された氷の物性を研究したが、この業績を十分まとめることなく1961（昭和36）年

に亡くなった。雪と氷に関して実験物理学では世界の第一人者で、イギリス南極地名委員会により南極の小島群が「ナカヤアイランズ」と名付けられた。

館の展示にはないが、昭和30年代に冬季間の交通確保のため北陸地方建設局の雪崩実験場を主宰し、多くの技術者を育てた庄田幹夫^{しょうだみきお}の師が中谷である。その意味で、北陸の克雪の恩人でもある。

■大人でも思わず歓声を上げる実験の美しさ

館では展示のほかに宇吉郎の業績をまとめた映像を常時上映。この映像を観た来館者を雪と氷の実験に案内している。



実演される実験はリアルタイム映像でも流されるが、低温の箱を覗き込んで間近で見られるので、館内に大きな歓声上がる

まずはダイヤモンドダストとして知られる氷晶の出現。低温のボックスの中で緩衝材のプチプチを潰すと、この中に入っていた空気に含まれていた水蒸気が一気に凍り、キラキラと輝く。これが氷晶であり、上空1万メートル付近でできる巻雲の正体だ。

次いでこのボックスの中へシャボン玉を入れると、膜の表面に雪の結晶の形が現れる。目の前で見ることができるので、小さな点（結晶）がみるみる伸びていく様子が克明に観察できる。完全に凍るとシャボン玉の膜はオブラートのようになり、ひらひらと落ちていく。



シャボン玉膜に氷の結晶ができる。小さい点が様々な模様を描いて大きくなっていく様子に魅了される

氷の実験では、特定の条件下で温度がマイナスなのに凍結していない過冷却水が登場。ペットボトルから氷皿の上に流すと、落ちた瞬間に凍結するため、鍾乳洞の中にできる石筍のような姿を現す。ただし石筍が100年で1センチ伸びるのに対し、これは一瞬。しかもほぼ透明の氷なので見た目も美しい。

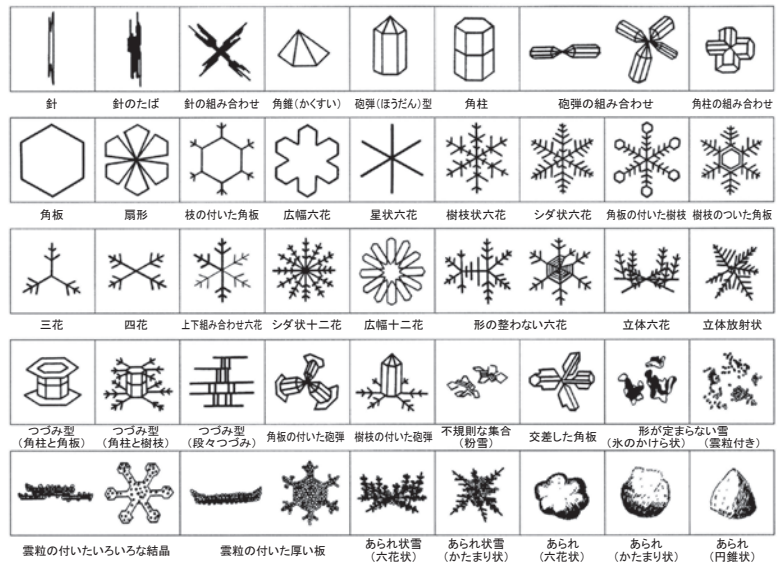
この他にも希望すれば氷のキーホルダーづくり、チンダル像観察もできる。チンダル像とは透明な氷に強い光を当て、氷の内部からも溶けていく時に6方向に枝が伸びて花びらのような模様ができるもの。内部が氷から水に変化すると体積が減り、真空の泡ができる。この泡が動きながら、周囲に模様が生まれ、成長する様子はユーモラスでもある。



透明な氷が中から溶けていく時に見られるチンダル像。直径数ミリなので肉眼でもよく見える。雪の結晶と比べると落書きのようなユーモラスな姿だ。花の中心に見える点が真空の泡

研究の道のりを書き記した名著『雪』（初出1938年 岩波書店『中谷宇吉郎集』第二巻）は、次のような言葉で結ばれている。

「このように見れば雪の結晶は、天から送られた手紙であるということが出来る。そしてその中の文句は結晶の形及び模様という暗号で書かれているのである。その暗号を読みとく仕事が即ち人工雪の研究であるということが出来るのである」。



雪の結晶の分類図 中谷宇吉郎『Snow Crystals』（ハーバード大学出版、1954をもとに作成）

柴山潟と一体化した設計、グリーンランドの石の庭

館は、柴山潟湖畔公園から眺めると、謎めいた三連の尖塔に見える。建築家磯崎新の設計で、展示室を丘の下に隠し、中から見上げると尖塔は雪をイメージした六角形の明かり取りになっている。

展示室の奥は柴山潟に面し、小さな石庭がある。これはアメリカの協力を得て丸ごとグリーンランドの大地から運ばれてきた岩石だ。重く荒々しい変成岩が北陸にあるという奇妙な景観が楽しめる。宇吉郎が病をおして研究に没頭した大地が切り取られ、故郷に置かれている。

「霧の彫刻」で知られ、世界で活躍する中谷英二子（中谷宇吉郎の娘）による霧のパフォーマンスもこの石庭が舞台となる。

その石庭の先、柴山潟に面した先端は「TeaRoom 冬の華」で、お茶と雪や冬にちなんだスイーツが楽しめる。湖に浮いたようなガラス張りの絶景で、入館しなくても利用できる。湖畔散策の休憩場所としてもおすすめだ。



柴山潟湖畔公園から見える
中谷宇吉郎 雪の科学館。
展示室は下の階にある



アルミニウム製の型で氷を挟むと、金属から伝わる熱で氷が溶けることを利用した科学実験。雪の結晶型をした氷のペンダントを作成することができる



グリーンランドの石庭は、記念写真スポットになっている

❄ 中谷博士が少年時代を過ごした大聖寺

中谷宇吉郎 雪の科学館から車で15分ほどで、城下町の古い町並みを残す大聖寺に着く。



中谷が書を書いた全昌寺の前の通り。全昌寺は芭蕉が立ち寄った寺でもある



学校での出来事を話して聞かされた「御前様の間」。公園整備に合わせて取り壊しとなる時、江沼神社境内に移築された。普段は無人のため見学の場合は宮司 熊田亮さん (TEL:0761-72-0551) へ。隣には中谷が通った錦城小学校がある



石川県立九谷焼美術館で、中谷の父そして中谷自身も愛した九谷焼が鑑賞できる

取材・文 橋本啓子

中谷宇吉郎 雪の科学館

石川県加賀市潮津町イー 106

TEL : 0761-75-3323

<https://yukinokagakukan.kagashi-ss.com/>

▶開館時間：9:00～17:00 (入館は16:30まで)

▶休館日：水曜日 (祝日の場合は開館)

▶入館料：560円 (一般)、280円 (75歳以上)、
460円 (20名以上の団体)、高校生以下と障がい者は無料
団体の場合は要事前予約



【写真提供】中谷宇吉郎 雪の科学館

P18上：館内の様子

P18右：中谷宇吉郎肖像写真

P20右：雪の結晶の分類図

P21上：全景

P21左：氷のペンダント



会員だより

「令和4年秋の叙勲」で受章された2名の方からご寄稿いただきました。
心からお祝い申し上げます。

瑞宝小綬章

後藤 敏行氏
(埼玉県久喜市在住)
元北陸地方整備局
道路部長



温かいご支援に感謝

令和4年秋の叙勲に際し、図らずも受章の栄に浴することができました。これもひとえに諸先輩の皆様方、同僚の皆様方のご指導、ご鞭撻の賜と心より感謝申し上げます。大変有り難うございました。

皆様への感謝を込め、北陸地方整備局勤務時代の思い出をお話しさせていただきます。

最初の勤務は、平成15年4月から2年間でした。白山浦にありました古い庁舎でしたが新潟駅前からのバス通勤に便利でした。初めての北陸地方整備局勤務、初めて一緒に働く仲間、近くのお店で晩酌セットから始まる飲み会など緊張感でスタートしました。

まず思い出すのは、平成16年10月23日土曜夕刻に襲った「中越地震」です。山古志村全村避難、芋川の河道閉塞（土砂ダム）、至る所で土砂崩落、トンネルの天井崩落・側壁の変形、まさに山が動いた驚き、自然の驚異でした。広域停電、そして余震、生活基盤となる交通も上越新幹線の脱線、関越自動車道の崩壊、国道17号和南津トンネルの天井崩落、通行不能な道路等々により交通遮断が発生、緊急車両も通れない、スーパー、コンビニの食料品の棚はガラガラ、社会基盤の被災状況把握もままならない状況でした。

当時、先輩の防災エキスパートの方々に、越後湯沢のホテルに泊まり込みで御支援いただ

き、市町村長に被災状況報告することができました。感謝の思いで一杯です。

その後も、権限代行で国道291号の災害復旧、調査・設計、突貫工事で復旧、北陸地方整備局のパワーを感じました。平成25年3月の退職時、新潟県知事に退任のご挨拶に伺った際、291号権限代行の話となり、知事から「さすが直轄、予想以上にスピーディに復旧して頂いた」と感謝の言葉がありました。

3度目の勤務となった平成23年7月には、新潟・福島豪雨、線状降水帯の発生、至る所で河川の氾濫、浸水が発生しました。福島県内只見川の増水により、福島県管理の国道252号の二本木橋等が流失、道路部・関係事務所職員が一丸となって、権限代行で新二本木橋等の復旧事業を推進したことを思い出します。

4年2ヶ月の北陸地方整備局勤務で、楽しい思い出も沢山あります。単身赴任でしたが、美味しいご飯（お米）と新鮮な魚を満喫しました。初めて知った「逆さ地図」、やすらぎ堤での花見、信濃川河川敷での長岡花火大会、2月の十日町雪祭り、高田城址公園での花見、立山連峰、室堂の雪の壁（大谷）、金沢の武家屋敷、輪島の朝市・道の駅での獅子舞等々魅力が盛りだくさんです。

北陸には、入省する前、生まれ育った群馬県から上越線で越後中里、石打丸山でのスキー、修学旅行での兼六園程度でしたが、住んでみて、北陸の魅力にとりつかれました。

また、なんとといっても、一緒に仕事をさせて頂いた北陸地方整備局の皆さんの温かい御支援、ご鞭撻に感謝、感謝です。

皆様の益々のご健勝を祈念しまして、御礼のご挨拶とします。

瑞宝双光章

小林 信夫氏 (新潟県上越市在住)

元北陸地方整備局 道路部 道路調査官

ご挨拶

この度、令和4年秋の叙勲に際しましては、はからずも瑞宝双光章の栄に浴し、身にあまる光栄と共に、諸先輩のご指導、ご支援の賜であり、感謝申し上げます。

顧みますと、昭和39年4月、高田国道工事事務所に採用となり、詰襟で出勤し公務員生活をスタートしたことが昨日のように思い出されます。

在職時の記憶として特に心に残っていることは、昭和55年4月に長岡国道事務所調査課で進めた“道路構造の検討”。その後の僕の業務人生に大きな影響を与えたと思っています。W事務所長から“冬期交通管理”について、講義を受け検討を進め『交通障害からみた積雪地域の道路構造について』として発表するに至りました。そして自動車工学からの検討と、S事務所長の『実現の可能性』の指導を受け『積雪寒冷地における道路線形について』として第37回建設省技術研究会で発表しました。また、第15回日本道路会議にも発表し、幸いにも“優秀論文賞”を受賞しました。

昭和63年4月、M事務所長と深夜まで議論を重ねて原案を作成し、地元警察署長との意見交換会を経て、さらにドライバーにアンケート調査を行いまとめた『工事用道路標示標識』を、事務所管内の道路工事に適用しました。現在はさらに検討・改訂された『新たな工事用標識』として多くの機関で使われています。

平成4年4月に長野冬期オリンピックの支援事業としての『小谷道路』を関東地建・長野国道事務所から引き継ぎ、1年で路線選定、ルート承認、地元協議、河川協議をまとめ、次年度には用地補償費充当まで進めることができました。

そして地域高規格道路として“上越・魚沼間”が認定されたことから、事業促進を図るため、ルート検討と名称『上越魚沼地域振興快速道路』の決定、期成同盟会設立まで進めることができました。これらは全て僕自身の手作業で進めましたが、それも上司の適切なご指導あってこそこの賜と感謝の限りであります。

また、平成10年3月にスウェーデン・ルーレオで開催された国際冬期道路会議に、ポスターセッションで参加することができたことは大変有意義でした。

平成13年に退職した後は、海外旅行の虜となりました。その中でも思い出深く残っているのはスイス・グリンデルワルドでのロングステイやドロミテ、イグアスの滝とマチュピチュ、モロッコの砂漠、アブシンベル神殿とルクソール神殿、地中海アドリア海クルーズ、そしてノルウェーのフィヨルドなどです。幸いにも良き旅友に恵まれて“07スイスチーム”や“チーム・ドロミテ”と命名して毎年1~2回再会し、旅談義を楽しんでいます。最近は新型コロナの影響で、国内の秘湯を訪ねています。


結びになりましたが、この紙面をお借りし、今日までに至る皆様方のご指導に対し感謝を申し上げるとともに、今後ともご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。



ノルウェー・ゾクネフィヨルドにて (2019年6月)

伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間をみつけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
令和4年度 建設技術報告会 	▶聴講者募集 1月16日(月)締切 ▶配信期間 1月18日(水) ~1月31日(火)	オンデマンド配信 ※土日を含む24時間 視聴可能 先着1,000名	[報告テーマ] ①i-constructionによる生産性向上、インフラ分野のDX ②社会資本の的確な維持管理・更新③雪に強い地域づくり④自然災害からの安全確保⑤環境の保全と創造	実行委員会事務局 (北陸技術事務所内) TEL:025-231-8036
第27回 社会資本整備 セミナー	1月24日(火) 13:00~15:30	長野ターミナル会館 4F「芙蓉・寿」 定員35名	■講演① 「最近の国土交通行政の 取り組みについて」 講師:北陸地方整備局 担当官 ■講演② 「コンクリート構造物の維持管理 と維持管理技術者の育成」 講師:丸山 久一 氏 (長岡技術科学大学 名誉教授)	社会資本整備セミナー 事務局(北陸地域づくり協会 企画事業部) TEL:025-381-1882 締切:1月20日(木)
	2月9日(木) 13:30~16:00	新潟県自治会館 1F「講堂」 定員80名		
	2月27日(月) 13:30~16:00	ボルファートとやま 4F「琥珀」 定員75名		
	2月28日(火) 13:30~16:00	石川県地場産業 振興センター 3F「第5研修室」 定員50名		

※新型コロナウイルス感染状況にともない、実施内容を変更する場合があります。事前にお確かめの上、お出かけください。

「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業 第28回 (令和5年度) 助成事業募集!!

詳細はこちら



募集期間 | 令和4年11月21日(月) ▶ 令和5年1月20日(金)

▶ 募集内容

	助成対象	助成金	助成予定数	審 査
① 技術開発支援事業	大学・企業・法人・任意団体・個人またはこれらの団体	20~50万円 (概算払 1/2 まで)	15件	・書類選考
② 地域づくり研究事業				
③ 大学連携等による共同調査研究事業	大学もしくは高専を含む2つ以上の機関	200~300万円 (概算払 1/2 まで)	2件	・書類選考 ・プレゼンテーション選考

◆助成数は増減することがあります。

編集後記

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

「新潟バイパスと古町が立体でつながる整備が進む万代島ルート」と題して、松平新潟国道事務所長からご寄稿いただいた。道路整備の構想段階から実施に至るまで、いかに多くの人々の想いが語られ、施工技術と照らし合わせ整備が進められてきているかがよく分かった。また新たに「にいがた2km」と連携したまちづくりが始まっている。新潟平野を眼下に万代島ルートを運転する姿とにいがた2kmを歩く姿を想像すると、期待で気持ちが昂ぶってくる。

雪は空気を浄化し、酒蔵の温度を一定に保つ。雪解け水、酒米にも恵まれ、雪国は酒造りに最適な条件を揃え、銘酒を醸成してきた。しかし話題に上るのは、水、米、杜氏などで、酒造りの場、地域の文化を育ててきた酒蔵に関する研究は進んでいなかったようだ。今年は、まず酒蔵見学をし、その歴史に想いをはせてみよう。北陸には行ってみたい魅力的な蔵がたくさんある。(事務局)



(一社)北陸地域づくり協会は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています

地域づくり in ほくりく 第30号

発行 令和5年1月4日
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
電話 (025) 381-1160
FAX (025) 383-1205
HP: http://www2.hokurikutei.or.jp